
館

岸田四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
館

【Nコード】
N4203I

【作者名】
岸田四季

【あらすじ】
その館は、今日も静かに森の中にたたずんで、貴方の、誰かの、その来訪を待ち続けているのです。
日常と非日常の堺に建つそんな、館に貴方も一度、来てみませんか？

「あそこまでねえ、酷いとは思わなかったよ、君はねえ」

その精力的な、てかてかとした額に、汗を光らせた部長がいつも通りの長ったらしい説教をまるで嬉々ともしているかのよう口をひん曲がらせながら投げつける。いつ見ても下品、以外の形容が思い浮かばない。

「君をね、プロジェクト主任に抜擢したの僕なんだよ。今回のことで誰が一番ねえ、恥かつか解ってるの？ 僕なんだよ、僕。そりゃあ君は失敗するのなんていつものことで馴れてるかもねえ、しれないけど」

抜擢した、などと一々言い添えるのが嫌味だし、そもそも大きなお世話だ、と私は思いながら、それでも黙ってその殆ど中傷にすら等しい説教を受け流す。私は、あまりに意味のない罵声を浴びせる事に費やす時間がどれだけ勿体無いか考えたりはしないのだろうか、とも時々思う。

「もういいよ、戻って。取り敢えず今回の失敗をなんとか埋めるように頑張ってよ、本当に」

自分は何もしないし、何も出来ないくせに威張り散らす、いわゆる「嫌な上司」をそのまま人間にしたかのようなこの男の元で働くのもいい加減嫌になってくる。私はいつそ「もうこんな会社やめてやるよ」とでも怒鳴りたくなるのを抑えてそそくさと自分のデスクへと帰っていく。

「全くもって、うるさい限りだよなあ。おっさん」丁度隣の席に座っている秋田が言う。

あのうるさい上司は、私たちの間では非常に評判が悪く、「おっさん」であるとか「あのおっさん」と言う風に呼ばれている。したがってその呼称がいわゆる一般的な「おっさん」に対して向けられることは殆どといっていいほどなく、私たちが「おっさん」という

ときには彼をさすのである。

「本当だ。偉そうに人に文句を言うのは、何か自分でやることやってからにして欲しいものだよ」私は心からの相槌を打つ。

「家が結構いいところなんだっけ？　それだけであんな無能でも部長ぐらいにまではなれるってんだから、世の中ばかばかしい事この上ないよなあ」

「全くだ」

そうして私は目の前に山のように積もっている資料に目をやった。見ているだけで頭が痛くなるようだった。自分でもよくもこれまでこんな資料を相手にプレゼンテーションを作り上げられた物だ、と思う。私に生来の上がり性がなければ、いまや私はこの課の、寧ろこの部の誰からも一目置かれる存在になっていたであろう出来ただけに、なんとも口惜しい物がある。

とにもかくにも、プレゼンテーションが終わってしまい、プロジエクトは不採用になった、そうすればこれらの資料はまさに、何の役にも立たないゴミの山に過ぎなくなる。それでも、中には他用途に転用可能なものも幾許か入っている。それを整理していく作業が必要だ。しかし、量がはなはだしく多い。さっきまで下らない罵声を浴びせられた私がどうしてまたこんな困難な作業に身をやつさねばならないのかと考えると何もかもが嫌になってくるようだった。

そんなことを考えながら漫然としているうちに、正午を知らせるチャイムが鳴り響いた。

他のデスクに座っている人々はめいめい伸びをしたり立ち上がった。私も大きく伸びをして立ち上がった。

「さて、飯でも食いに行くか」秋田が言う。

「そうだな、いつものところでいいよな」

「ああ、いこういこう」

そういうと秋田は立ち上がり、パソコンを休止状態にした。私も机の上で散らばった書類を一箇所に纏めると、財布がポケットの中にちゃんと入っているのを確認して、部屋を出た。

会社を一步出ると、そこには美しい自然があるわけではなく、代わりに理路整然とした街が、森のように立ち並ぶビル郡がある。いつ見ても代わり映えのしない街を見てると、いっそ何か、それこそおとぎ話のような不思議なことの一つや二つでも起こって、私の人生を大きく変えてくれればいいのになあ、と思う。

そんな無味乾燥とした街を背景に、歩いていると、十分とかからないところにもいつも昼食を取りに来るファミリーストランがある。毎日来るには若干遠いような気もするが、その代わりほかの社員を見かけることもないので秋田と二人、存分に愚痴でも何でも吐きあえる、一種の自由を、僅かな時間を担保に入られると思えば、安い物だ。

私たちはいつもどおりの昼定食を注文する。メニューを見ずとも、最初からこれだ、と決めている。もう四、五年も通っていると、自ずから注文するメニューは定まってくる。こういう風にして差別化の図られない、限りなく同質に近い一日を重ねる事が、日常というものなのだろう。

私はグラスを傾けて、渴いた喉に水を流し込む。秋田はどうにも外が気になりでもするのか、しきりに窓の外に眼をやって眺めている。

特にお互い口を開く事もなく、四、五分が過ぎると昼定食が二人前運ばれてくる。箸を取り、いただきます、と私は半ら儀礼的に呟いてから、その箸を割る。いつもどおり、中々綺麗に割るのは難しい。

「なあ」

秋田は白米を頬張りながら声を出す。

「なんだ？」

どうせ二人で食べるなら、静かに食べるよりも喋りながらいっそ姦しく食べる方が、楽しい。

「やっぱりさ、今日って言う日は日常の一部なんだろうなあ」
「どういうことだ？」

「結局毎日毎日同じことばかりで、違うもんてったら説教の内容ぐらいだよなあ、ってことだよ」秋田はまるで呟きでもするかのように言う。

「まあ、そうだよな」おおむね言っている事には納得できる。そういうばおっさんに私が何だかんだと難癖を付けられるのも、よく考えてみればいつもの事だ。

「結局こういう風に同じような毎日を繰り返して、年をとって、そのままやっぱり俺たちは皆同じように死んでいくのかなあ……」

秋田は遠くを見るようにして呟く。

「そう、なのかもしれないな」私も一瞬自分のその恐らく安らかであろう死に様を夢見るように思い、そしてすぐさま振り払う。

「何かさ、こう、大きな変革ってのが欲しいよ。俺はさ。最近よくそう思ってたさ」

「偶然だな。私も今日は何とはなしにそんなことをふと考えていたよ」

「へえ、お前もそんなこと考えたりするんだなあ」

「どういう意味だよ」

「お前は、なんだかんだと言いながらも、納得して、いそうだと思ってたからさ」

「納得して、か……。確かに私はなんでも、何だかんだと自分で理屈をつけて納得する癖はあるな……。しかし、最近はそうともいえないさ。私だってこうもつまらない日常が続けば、変革の一つや二つくらい欲しくなるさ」

「だろうねえ。尤も俺にはとてもじゃないがお前のように我慢は出来ねえけどさ」そう言って秋田は笑った。そして、「ま、いいや続けるぜ」と言う。

「それでさ、人づてに聞いた話なんだけどさ、この近く、といっても電車で三十分はかかるけどさ、そのちょっと街を外れたところに森があるんだよ。そんでもって、その奥部にはさ、変革をもたらしてくれる館があるんだとよ」秋田は、まるで興奮が冷め遣らない

猫のようなぎらついた目で、熱っぽく、捲し立てるように言葉を繋いでいく。

「何だそりゃあ？」私はまるで狐にでもつままれたかのような気分になる。全く意味が解らない。

「いや、俺にもよく解んねえんだけどさ。でもなんか、面白そうじゃないか。まるで子供の頃色々考えたみたいでさ」

「まあ、他愛ない子供の言いそうな陳腐な話ではあるよなあ」

「そう言ってやるなよ。俺にこの話をしてくれた奴は本気だったぜ」

「そいつが見たのか？」

「俺が知るかよ。でも見たような口ぶりだったし、どうなんだろうな」

「まあ、いいことにしよう。それで、その変革をもたらしてくれる館とやらがどうしたんだ？」

「いや、ガキみたいだって笑われるかもしれないけどよ」秋田は少し照れ臭そうに下を向いて、少し言葉を濁らせる。そしてふっと息をついて私のほうを向いた。

「その館にさ、行ってみないか？」本当に少年のような顔ときらきらとした瞳で彼は何の屈託もなく言った。

私は少し面食らって、一瞬呆然とした。そんな子供の作り話のような物を信じるでも言うのか、と。

「はは、そんな顔をきくと思っていたよ。ある意味予想通り」

「何だそりゃ、私を担いだのか？」

「いや、別にそういうわけでもない。俺は本気で、行ってみよう、とお前を誘っているわけだよ」

「まあ別にどちらでもいいが……」

「まあ、別に構いやしないだろう？ 森林浴は体にいいとも言うしよ、軽いストレス解消のついで行ってみようじゃないか、マイフレンド」

「気持ち悪いな、マイフレンドなんて」

「愛想のない奴だ」

「で、いつ行くつもりなんだ？」

「明日にでも、有給とって行つてやろうじゃないか」彼は当然の
ような顔をしていう。

「有給とって？ 何を言ってるんだ、そんなことが出来るもんか」

「良いじゃないか、別に。たまにはあのおっさんの顔面にストレ
ートでも食らわしてやれよ。殆ど休みもしないお前が突然有給でも
取れば、少しは自責感じてあの下らない説教も減るかも知れんぜ」

そう言われてみれば、そうだな、と私は思う。あまりに従順すぎ
ればそれは相手を付け上がらす結果に過ぎない、ということもある
のだろう。

「そうだな。よし、明日は有給だ。館へだろうと何だろうと行っ
てやるさ」

「はは、その意気だ」秋田は笑う。「じゃあ、明日いつもの駅で
十時に待ち合わせだぜ」

「了解した」

もう晩夏とも言うべき季節だが、五時を回っても陽はまだまだ高
くにあった。私は今日の仕事はもう切り上げて帰ることにした。明
日は、休みだ。

私は会社を出て、乗りなれた電車に乗る。家まで十五分程度だが、
その間に少し眠る事にする。プロジェクトに備えて最近は少し働き
すぎといってもいいくらいだった。やはり有給の一日くらいとった
ところで咎められる筋合いはない。

うつらうつらとしているうちに、直ぐ電車は家の最寄りの駅に着
く。一日と言う長い時間を機軸にして考えれば、十五分など瞬き程
度の時間にも過ぎない。

私は電車を降りて、がらりとしたホームに一人残された。自動販

売機の前に立つと、最近CMで新製品として喧伝されている缶コーヒーがあった。確か、私の好きな女優がアピールしていたなあ、と思う出す。

すると私は無性にそれが飲みたくなって、財布を取り出す。財布を開くことなくICカードを自動販売機に当て、ボタンを押す。ごとんと音を立ててその缶は取り出し口に転がり出てきた。

タブを開き、その薄黒く、甘ったるい液体を喉に流し込む。全くもって以前からあるタイプのものと、何が違うのかさっぱり理解できない。それでもきつと、新作とあるからには何か違うのだろう。私は一度にそれを飲み干して、ゴミ箱に投げ込んだ。

駅の改札を抜けて、五分と歩かずに、私のマンションは見える。いい加減うだつの上がない会社員、というものを脱して一軒家ぐらい持ってみた物だ。尤も一人身には寧ろ寂しく、宝の持ち腐れと言う言葉が最適ではあるのだが。

私は部屋のドアを開けた。するといつもどおり、殺風景な景色が瞳に飛び込んでくる。私はその秩序的な無秩序の中に、唯一堂々とした振る舞いでたたずむソファに身を投げ出す。やわらかい感触が全身を受け止め、包みこんでくれる。自然に溜息が零れる。瞼を閉じて時の流れに私は身を任せる。

気が付けば、陽はすでに傾いて、幾許の時間がたったのだろうか、まさに夕刻と形容すべき、美しいオレンジが部屋の中に充満していた。

時計を見上げると、もう六時を過ぎていて、一時間近くもこうしてソファの上に転がっていたのか、と思うと自分がまるで特権階級にでもいるような気がする。きつと最大の贅沢とは限られた時間を精一杯無駄遣いすることなのだろう。

私は冷蔵庫を開き、残り物をばつとテーブルの上に拡げる。明日の夜はどこかで美味しい物でも食べようかなあ、と少し考えて財布の中身と天秤にかける。つりあいは取れない。

簡単な夕食を食べ終えた私は、ふと先ほど秋田の言っていた「変

革をもたらす館」のことが気になった。そういえば明日行くんだっけ、程度にしか考えていなかったが突然興味が振るように沸いてきて、脳裏にこびりつく。

私はノートパソコンを立ち上げ、インターネットブラウザを起動した。

ホームページにも設定されている、有名な大型検索エンジン搭載のサイトにアクセスする。

私は、「変革 館」とだけ入力して、検索ボタンをクリックした。途端に溢れかえるような情報量が検索ヒット数として表示される。この中で目当ての情報を探せといわれたら、一週間かかっても選別が終わる気はしない。

私は、秋田が「電車で三十分の町外れ」といつていたことを思い出す。おそらく電車の終点だろうと予測がつく。森があったかどうかは定かではないのだが。

私は、「変革 館 森」、そしてためらってから終点駅の名前をフォームに入力し、検索ボタンを押す、つもりがついとうっかりその隣にある、検索一件目を表示するボタンを押してしまった。

一瞬画面が真っ白になり、すぐに情報を取得して画面が文字で多い尽くされた。私が普段なら決してアクセスしないような下らない掲示板サイトだった。

幾つかのトピックを見てみたが、やはり下らない井戸端会議のよなものが長々と繰り返され、スラングもあって解らない部分も多かったが、簡単に纏めればやはりその駅から数分歩いたところに森があり、その中に不思議な館がある、と言うまさに秋田が言っていたのと同じような話だった。体験談を語る情報も幾つか転がっていたがどれも具体性に欠けてよく解らなかった。

マウスホイールを回してページを下にスクロールさせていくと、段々と否定的な意見が多くなっていった。そんな館があるわけがないだの、夢の見過ぎだの、と。そして挙句には掲示板を見てついききその館に行ってきたばかりだという書き込みまで出てくる始末

だった。曰く、その館は床も所々抜けている廃墟で、今にも崩れそうだと。

どの情報もなんだかどこかうそ臭くまるで世界が総出で私を騙そうとしているかのような感じがした。なんだか頭がぐらぐらするようで、私はパソコンを閉じた。

時計を見ると、あろうことかもう九時を既に回っていた。あんな下らない情報を探す為だけに、こんなに時間を掛けてしまうとは、とも思う。熱中すると周りが見えなくなり、時間も何も解らなくなってしまうのは昔からの事だ。

私は、どうせ休みを取るならば、きつちりと疲れを落とさなければ意味がないと思って、いつもから考えると随分早いのが、今日はお布団に入ることにした。

電気を消し、ベッドの中で全身の筋肉を伸ばし、弛める。こんな解放感を味わうのはいつ振りだろうか、と思う。ゆっくり寝て、明日は森の散策。全くもって非、日常的だ。こうしてみると、何となく、気持ちが高ぶりでもするかのような感じがした。体を安らがせる為、そのための日に備えて気持ちが昂ぶるなど、まるでよく出来た皮肉か何かのようだった。

夢をみるでもなく、眼が覚めたのは、いつも通りに朝五時半を知らせる目覚まし時計の、耳を痛めつける様なじりじりという金属音のせいだった。

私にとって余り喜ばしい事ではなかったので、少しいらだたしく思いながらそのスイッチを止め、再びまどろみの中に身を委ねる。うとうととしながら、夢と現実との間を彷徨うというのは何にも勝る心地良さである。次に私を凜とした鮮明さを持つ確かな現実を引き戻したのは、携帯電話の鳴る音だった。

「誰だ？　こんな朝から何の用だ？」

「俺だよ。ていうかこんな朝からって言うけどもう十時だぜ。お

前、その言い分だと今起きたってのか？」

「え……？」私はそう呟いて先ほどたたきつけるようにしてスイッチを止めた時計を見る。確かに時間は十字を少し過ぎている。

そこで頭の中が少しずつ整理されていく。昨日の出来事の記憶が徐々に輪郭を明らかにしていく。

「あ！ すまん！ つい休みだからって寝すぎてたよ」

「おいおい、全くしつかりしてくれよ。十時集合で十時に起きるなんて、お前はワープ能力でも持っていたりするのか？」秋田は笑いながら皮肉を浴びせる。

「すまん、本当にすまん！ 今すぐ出かけるが……二、三十分はかかる」

「まあ、仕方ねえわな。館は逃げたりせんさ。とはいえ早く来い」彼はそう言って笑い、電話を切った。

私は大慌てで準備をする。パジャマを文字通り捨てるように、脱ぎ捨てて、クローゼットから目当てもつけずに適当に引っ張り出した服を着た。

朝食を悠長に食っている暇など到底ありはしないので、急いでポケットの財布と携帯電話を確認して飛び出る。

駅に走っていくと、次に出る電車が五分後だと表示されている。私は走って駅の直ぐ隣にあるコンビニに駆け入って、菓子パンを二つ買い、また走って駅構内に行く。

ホームに私が辿り着いたとき、丁度電車も入ってきた。平日の十時過ぎの電車に乗っている人間は相当奇異な物で、況してや私の年代の男など他に一人もいやしない。実は今、私無職なんですよ、とこの車内にいる誰かに話しかけたとしても疑われる余地など一切ないだろう。

私は急いで手に提げたビニール袋からパンを取り出して頬張る。幸いな事に電車が会社の前の駅に着いたときには両方綺麗に私の胃袋の中に納まっていた。

ホームに降り立つと、向こう側のホームで秋田がベンチに座って

ぼうつとしているのが見えた。

ここから声を描けるわけにも行かないので、私は陸橋を渡り、向こう側のホームに渡った。

「よう、遅かったじゃねえか」

「悪いな。休み慣れしてないもんでね」

「何だよ、嫌味かよ。遅れたくせに」

そう言って秋田は笑い、私もそれにつられて笑った。考えてみればこんな時間にいい年をした男が二人で大声で笑っているなど、迷惑以外の何者でもない上に、どれほど奇妙で空間に対して相応しくないのだろうか、とすら思う。

「じゃ、行くか。あっち行きの電車はあと十分しないと来ないけどさ」

「何だ、じゃあそれまで退屈だな」

「飯は食ってきたのか？」

「ちよつとコンビニに走ってきたよ」

「なあんだそりゃ。休日の飯がコンビニで、なんて哀しい事この上ないなあ、日本人は」秋田が自嘲的な溜息をつきながら言う。

「日本以外だってそうじゃないのか」そう私は行ってから、そういえば他の国は電車の一本をとってみても日本ほどこちきちとはしていなかったなあ、と思い出す。こんなにもあくせく働いて、休みの日にまできちきちとしたスケジュールに沿って何の意味があるのだろうか、と思う。

ホームで二人、他愛のない話をしているうちに、電車はのろのろと滑り込むようにしてやってきた。

電車に乗ると、やはり人はいない。駅が進むごとにどんどん人は減ってさえ行くようである。そうしていると世の中が、いかに忙しい人々で埋め尽くされているかがよく解る。

三十分と言う長いとも短いとも言いがたい、微妙な時間がのろのろと過ぎると、もう電車には私たち以外に誰一人として乗っていないかった。そういえば終点駅からしばらくがそのうち廃止されるとい

う噂を聞いたこともある。真偽は定かではない。

間もなく終点です、とのアナウンスが響いて、電車の速度が緩やかになっていく。そして、何かが終わる時のように、緩やかに止まる。

「ようやく、着いたな」秋田が言う。

「そうだな、まあ、ようやく、と言うほどの時間でもなかったけどさ」

「それもそうだ」

私たちは電車を降りた。一体誰が使うのかも解らないような辺境の地にあるこの駅なら、なるほど廃止されても不思議ではない。改札口には人もいず、これなら無断で通り抜ける事も出来そうであった。そんな中においてあるICカード専用の改札はある種滑稽すらあった。

「さあて、歩くぞ」

秋田はそう言っずんと歩き出す。私も置いていかれてはかなわない、と後を追う。

「どれぐらい歩くんだったっけ？」

「さあ、せいぜい十分ぐらいの物だろう」

そう言っ彼は、ポケットからくしゃくしゃに折りたたまれた地図を取り出して見る。

「こっちだな」

彼は指を指し、その方向に歩いていく。私も地図のひとつぐらいすってくればよかったなあ、と思う。

あっちに曲がったり、こっちに曲がったりとぐるぐる歩いていくうちに、段々と寂れ方が酷くなっていく気がする。歩けば歩くほど、まるで「現実から」離れていつているかのようだった。

しばらくそれが続けるうちに、神社が眼に入った。もうしばらく掃除すらされていないように見受けられ、こんな所で奉られる神様もかわいそうだなあ、と無礼にも神に対しての憐憫すら感じているとき、秋田が声をあげた。

「おお、ここだ、ここ。この神社の裏手から森に入れるみたいだぜ」

「あ、この裏手なんだな。じゃあちょっと神社にお参りでもしてから行くか？」

「別に、お参りなんていいよ。それより早く森に入ってみようぜ」

「信心も何もない奴だなあ。まあ、私にあるわけでもないけどさあ」

「信心じゃあ飯は食えんよ。俺はそういう迷信じみた事は大嫌いなんだ。とにかく行くぜ」

「そこまでいってやるなよ」私は笑いながらさういう。

そこは、黒が支配する森だった。

森に入る前までは、暑ささえ感じたのに、今はそんなものは一切感じない。寧ろ薄着できた事を後悔するほどの寒気すら感じる。

木々は鬱蒼と生い茂り、空すら満足に見上げられない。まだ昼前だと言うのに、まるでもう逢魔時にでもなったかのような薄暗さである。本当にそこらここから妖怪の一匹や二匹、出てきても不思議ではない。

木々のそれらはどれも、生気を吸い取られでもしたかのようにうな垂れている。そして、その葉や枝もどこか黒ずんでいて、力が無い。

森は、静かだった。私の足音以外に聞こえる音は、時折鳥がぼさばさとその不吉な、黒い翼を大きく羽ばたかせる物か、若しくはそのくちばしを広げ、よく通るあの耳障りな声で鳴いているかぐらいしかない。

これだけ静かな空間にいと、まるで一つの物音が、何かの脅威でもあるかのように感じられる。呆然と自分の立てる足音に心をびくつかせながら、二、三步放心したかのようにして私は進んでいった。

そして、その歩を止めて、私は周りを見渡した。大きな不安が私の周りを覆い包んでいくかのようであった。その時に、私はふと気が付いた。

秋田が見当たらない。

まさか、私が呆然と周りを見渡している間に、それに気づかずに先々と進んでいってしまったのだろうか、と思って慌てて私は走りだした。

しかし、いくら走れども、彼の姿は見当たらなかった。まさか、方角を間違えたか、と思って先ほど来た道を全く逆に戻って言うってみる。すると最初の、森の入り口に辿り着いた。そしてふと足元を見ると、くっきりと足跡が残っている事に気がついた。

こんなに足跡が残るほど、土が湿り気を帯びていたのだろうか、とふと気になったが、しかし、そんなことを考えている暇はない。先ずは秋田を探す事が先決であった。

私の足跡がつくのなら、きっと秋田の足跡もつくはずである。私は這いつくばるようにして、地面に眼をやった。

私の足跡は確かにくっきりと残っているが、それでも不思議である。

彼のと思しき足跡は、と言うよりも私以外の足跡は一切として見つからない。

何かが、おかしい。

私は夢でも見ているのだろうか？

辺りを見回すが、誰もいない森は、先ほどと同じ静まり返ったまま、時折鳥の鳴く声が遠くに響き渡るのみである。

「おい、秋田！ どこだ？」

私は焦燥の余り、裏返りかけた声を限りに叫んでみる。まさか樹海のように一度入ったら帰ってこれないことはなからうが――実際に私は入り口までは少なくとも戻ってこられた――それでも秋田が道に迷ったりしてでもいるのではないか、寧ろ私が、何か大きな勘違いでもしているのではないだろうか。

先ほどの声は相当範囲まで聞こえたはずであったが、返事は一切ない。代わりにその声に驚いた鳥がばさばさと飛び立って言ったくらいのものであった。

取り敢えず、ここに立っていても仕方がないので、その「館」を目指してひとまずは歩いてみる事にした。きっと彼もそのうち「館」に来るであろうから、そこで合流すればよいのだ、そう思っている。

道は、ひたすら暗く、ぬかるみ、まるで人が通る事を想定していないようだった。それでも私はとにかく歩く事にした。

これだけ大変なのだ、歩き歩いて、辿り着いた先には素晴らしい物が待っているに、違いない。

しばらく歩きながら、そういえば、今何時だろうと思って無意識に左腕を水平に持ち上げる。しかし、そこに時計はなかった。私は普段出かけるときは常に腕時計を着用してはいるのだが、そういえば今日は必要あるまい、と思ったのと急いでいたのでつけていなかった。そして、ポケットからこれもまた殆ど無意識的に携帯電話を取り出して、時間を見た。

そこで、そういえば電話と言う手段があるじゃないか、と思い出す。

全くそこに思いを辿り着かせられなかった自分を恥じながら、リダイヤルのボタンを押す。

しかし、電話は通じなかった。向こうがその電話を取る、とらない、以前に。よくよく見てみれば、電波の強度を表すアンテナは、圏外の文字を現していた。

そんな馬鹿な、と私は思う。

つい先ほどまで電波も普通に通る、人の住んでいるところにいたのに、森に一步入った途端電波が通じなくなるなんて、そんなことがあるのか。ちょっと電話の調子が悪いのだろうか、と思って私はポケットにそれをしまった。

最早、薄暗いという言葉は、暗い、と言い換えた方がいいような様子を呈していた。空は完全に太陽に向かって伸びることを放棄し

た木々の葉にさえぎられ、少しも見えない。多少視力が弱ければ、そろそろ鮮明にものが見えなくなってくるほどの暗さだ。

私は、むき出しになっている切り株に腰を下ろした。

どうにも、不安が先行しだしてきた。先ほどまではそこまで大きくなかったのに。私はちゃんと家に帰れるのだろうか？ 秋田とは無事合流できるのだろうか？ それとも……。

不安の中、無性に喉が渇くことにはたと気づいた。これは焦燥のせいだろうか、それともさつき久々に大声を出したからだろうか。兎にも角にも、飲み物が欲しいなあ、と思うが、今は飲み物どころか飴の一粒すら持っていない。とうとう途方に暮れて、俯きながら頭をかきむしった。

顔を上げて、ふと視線を横に投げつけると、怪しげな光が、はるか遠くに見える。あの光は何だろう、とぼんやり考える。そして直ぐに解る。

館は、実在したのだ。

そこまでの道のりは、簡単な物だった。ただ光に向かって、道なりに行けばいいだけだった。殆ど何かを考えるでもなく、とにかく歩を進めていった。

その洋館は、非常に美しい外見をしていた。黒く塗られた外壁はそれだけで何処となく荘厳で、見るものを圧倒するかのようでもあった。

私は吸い寄せられるようにしてドアに近づいていった。近くによって見ると、黒く塗った壁は、一部はがれかけていて、その下からはぼろぼろの木がむき出しになって見えていた。

いつからここにあったのだろうか、この館は、と思う。塗装がはがれ、その下までぼろぼろになるには相当の時間がかかったはずだが、それにしても今の今までこんな館が本当にここにあるなどと言うことは知らなかった。

なんとも不思議なものだなあ、と思いながら、急に、喉の渇きが気になります。

私は意を決して、館の正面のドアを叩いた。
固く、重いその大きな扉は予想外に大きな音を立てた。これならばきつと館中に聞こえるだろう、と思う。

しばらく待っていると、ぎい、ときしむ音を立ててドアがおもむろに、厳かに開いた。

「お待ちして、おりました……」

いかにも育ちの良さそうな、正装をした初老の男性が中から出てきて、頭を下げた。

「お客様はお一人ですね？」

一体これは何かの店なのだろうか、と思い、そしてこんな所で経営が果たして成り立つのだろうか、と疑問を抱く。

「もう一人、同じくらいの年齢の男が来ませんでしたか？」

「同じくらいの、年齢の方ですか？」

「そうです、秋田って言うんですけど」

「はて、存じ上げませんね。それより中へどうぞ。喉も渴いていらっしゃるでしょう？」

何故そんなことを知っているのだ、との疑問をさしはさむ事もなく私は頷いた。とにかく喉の渇きが分ごとに酷くなっている気がして、早く何か飲みたくてかなわない。

「それでは、どうぞ中へ……。ただし、入ってから後悔するのだけは、止めてくださいね。もう、遅いですから」

そう意味深な事をいって彼は手を館の内部へと向ける。後悔とは一体何のことだろうか。もしかしたらいわゆる「ぼったくりバー」のような店なのかもしれないな、と思いつつも、それならそうだったと話のネタにでもするしかないな、と納得して、私はその手の向かうほうへと招きいれられて行った。

後ろでがたん、とドアの閉まる音がする。辺りが全て真っ暗になって何が起こったのか、と一瞬思案する。途端に辺りが一面の光に

満たされて、閉塞感に似た感情が一度に払拭されていく。

先ほどの男は笑顔でこちらについてくる。そうしてゆっくりと手を差し出した。

私はその手が一体何を示して、或いは示そうとしているのかを推し量りかねて、顔に疑問を浮かべた。

「おや、どうしたんですか？」

男は先ほどからの薄ら笑いを顔に浮かべたまま、その手を引っ込めようとはしない。

「どうしたというか、その手は何ですか？」

「ああ、この手のことですか！　もしかしてこちらの館でのことは何もご存じないのでしょうか？」

「はあ、すみません……」

「いえいえ、謝る事はないですよ！　簡単です、お財布と携帯電話をここに出してください、と言うことです」

彼はさあ、早く、と付け加えんばかりの勢いで手をぐいはこちらに押し出してくる。

「え？　どういことですか？　そんなこと何処にも書いてありませんでしたよ」

「ええ、書いてませんがそれがどうしましたか？」

「どうかしましたか、じゃないですよ。いきなり説明もなく財布と携帯を出せ、なんていわれても納得できませんよ」

「まあ、いいじゃないですか。どうせもう必要ないものでしょう……？」

「必要ない？　ますます話が解りません」

「ああ、何もご存じなかったのですか。こちらの館、ドアは一つしかありません。そしてそのドアは、外側からしか開かないんですよ」

「……え？」

私は、その男が何を言わんとしているかを全く理解しかねて、言いよどむ。それはつまり、私はここから出られない、と言うことだ

ろうか？

「簡単です、貴方はここから出ることはありませんよ。もう二度と、ね」

「どういうことだ？ 騙したのか？」

「騙す？ この館からは確実に出られる、などと言うことは書いてなかったでしょう？」

私は頭がくらくらとしてきた。一体何だって私はこんな夢を見ているのだろうか？

「まあ、とにかく早く携帯電話と財布を出してくださいな」

男は再び手を近づけては、ぐいと押すようにしている。

なんだか私も、それがきつと正しいのだろう、と何とはなしに思ってきた。そう、きつと今ここで持っているものを差し出すのが正しい事、なのだ。

「なあ、ここが変革をもたらす館だって言うのは本当なのか？」

私は、それだけでも、確認しておかなければならないような気がして問いかける。

「変革？ さあ、どうでしょうねえ。少なくとも貴方の日常は代

わったのではないでしょうか」

「それも、そうだなあ……」

「そうでしょう、さあ、早く」

私はもう抵抗する事も出来ずに、ポケットから革財布と携帯電話を取り出した。そしてその男の手の上にそれを置いた。

「確かに。さて、それではこれからどうなさりたいですか？」

男は手をようやく後ろに引っ込めると、そのままの薄気味の悪い笑顔で問いかける。

「どうしたい……外にはどうせ出してもらえないんだろう？」

「ええ、勿論です。でもまあ、いいじゃないですか。幸せなんてものは、何処にいても見出せますよ」

「そんなもののかねえ」

「ええ、きっとそんなものですよ」

私は、近くの椅子に腰を下ろした。一体何がどうなってるのか解らなくなってきた。唯一つだけ解る事は、今、私には非日常が訪れた。まさに、変革とでも形容すべき、完全なる非日常だ。

「そんなに、この館はお気に入りませんでしたか？」

男は唐突に尋ねた。

「この館が？ ううん、気に入る、気に入らないと言うよりも、どうしてこんな事になったんだろうなあ、と」

「知っていますか、あらゆる選択には、リスクが伴う物なんですよ。そのリスクを鑑みた上でのトレードオフが大切なんです」

突然その男は口を開くと、素晴らしい始めた。そして一息置いて続ける。

「私だって別に、貴方が嫌いでも構いません。でも、こうする事になっているんです。それは誰、彼と言う意志が絡んだものではなく、もっと複雑な構造によって、偶然この形に落ち着いているだけですから」

「じゃあ、どうにかして出してくださいよ。私はこんな所でぼうっとしている暇はないんです！」

私はつい、感情的になって、怒鳴りつけてしまう。それでも、それぐらいのことをする権利はあるはずだ。ここまでされて黙って色と言うほうが難しい。

「それは、無理です。私からの精一杯の譲歩として、ちゃんと忠告したじゃないですか。後悔しても、もう遅い、と。それなのに貴方はこの館に入ってきました。それは、全てを承知したのと一緒のことじゃないですか……？」

そんな馬鹿な話があるか、と叫ぶ気力もうない。それにだんだんと、彼の言っていることすら正論のような気もしてきた。喉の渇きがみしみしと音を立てるようにして酷く感じられる。

「取り敢えず、水を一杯いただけますか？」

私はもう顔も上げずに、男に小さく問いかける。

「ええ、お安い御用ですよ」

そう言つて男は奥へと入っていき、そして直ぐにグラスに入つた、濁つた水を持つてくる。これは一体何処で何をとつてきたのだ、と聞きたくもなるが、それよりもこの水でもいいから飲みたい、と言ふ氣になる。

私はグラスを傾け、その茶色く濁つた液体をぐいぐいと喉に押し付ける。こんな物を飲んでも美味しく感じられるのだから、喉の渴きと言うものは恐ろしいな、と思う。

「心配せずとも、ちゃんと三度のご飯と暖かいベッド、それから貴方の部屋ぐらいはありますよ。まあ、楽しもうじゃないですか、今、この、現実と言うものを」

どうか、これが、ただの、悪い、夢であることを、私は、祈る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4203i/>

館

2011年4月2日20時18分発行